

教務だより

2016年3月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

人生はマラソン

茗溪塾塾長 宇野雅春

東京マラソンで髄膜炎を克服して参加した今井正人選手は、惜しくも日本男子中の5位で終わりました。自身の出身地である南相馬市を中心に、震災から立ち直ろうと懸命で頑張ってきた人たちの熱い視線も今井選手の活躍に集まっていました。一時は髄膜炎で歩くのもやっとだった今井選手はリハビリを経て、オリンピックへの代表選を兼ねたこの東京マラソンに出場していました。「一歩でも半歩でもいいから前に進もう。」と考えていたそうです。歩くのもやっとだったということを大会の後で知って本当にびっくりしました。オリンピックは無理かもしれないけれど、彼の努力はいつか何かで実を結ぶと思います。

受験が一段落のこの時期だからこそ強く感じるのかもしれませんが、受験自体が多くの困難を伴います。早い時期から理想的に勉強を始められる生徒は、むしろ少数派、ついて回るのは外からの困難というよりは、自分自身との戦いのほうが多いと思います。

なまけたい自分、遊びたい自分、そんな気持との戦いのほうが重く困難なこと…。そして辛い！と思うのですが、世界を見回せば、それ以上の辛いことがたくさんあります。

460万人が難民化しているシリアとその受け入れを巡って苦悩するヨーロッパの国々。将来への道を閉ざされてしまっている人々のことを考えると、将来の夢に向かって「受験」ということが、とても恵まれた境遇に思えてきます。

5年前の3月11日のことを時折忘れがちですが、私たちの周りと生活を取り巻く状況が一時麻痺しそうであったこと…。被災した人々が未来を奪われたように、もしかしたらすべてが立ち行かなくなるのではないかとと思われる一時期を私たちは経験しました。

計画停電で、夜電気が使えない…というとき、塾としてはもはや営業できないという状況がありました。土曜日曜の昼間を活用してそこは何とかやり切りましたが、塾が従来やっていることも、再検討を迫られることが、多々ありました。最初の関門は、震災の2日後に行われた卒塾式です。借りていた東部フレンドホールにもやるかやらないかを伝える必要がありました。そこで各教室の教室長にアンケートを取りました。ファックスで交わした意見の片隅に「こういう時だからこそ、やるべき！」という意見がありました。評決は1票差で実行することになりました。東部フレンドホール側は、特に驚きもせず、使っていただけるほうがありがたいという印象だったので、時折揺れの来る舞台の上で卒塾式は実現しました。電車も間引き運転でしたが、このときはまだ起こっていることの深刻さに気がついていなかったというのが事実です。犠牲者の数は、どんどん膨らんでいき、福島原発の深刻さもそのあと明らかになってくるのです。

そんな状況下でも卒塾式には、多くの生徒父母が参加してくれました。震災の深刻さを考えれば、自粛という名のもとに静かにしているべきだったのかもしれませんが。

でもその時感じていたのは、誰かが「続けていくこと」がないと復興ということも実現できないのではないかという気持ちです。誰もが大きな困難にぶつかります。長い人生の中ではいろいろなことがあるからです。でも、普通に生活を維持していくことも、実は戦いだし、走ることと同じ意味があるとその時は思ったのです。

受験をクリアして卒塾していく生徒の皆さんも、これからも続く長い人生というマラソンを走ることになります。続けることをやめなければ「1歩でも2歩でも」前に進むことができます。どんな困難に会おうとも、日々を明るく自分を律しながらやり続けていってほしいと切に願っています。